

はじめに

かつて、私は音響メーカー・パイオニア株のサラリーマンでした。カタログや広告・CMなどの制作、イベントプロデューサーなどの宣伝マン一筋。20歳代後半は労使協調路線の電機労連の中で、闘う旗を掲げてパイオニア労組の役員を務めたこともありましたが、それも機関紙部長や情宣部長など広報担当で、まさに宣伝一筋と言ってよかったです。その私が20年前、50歳の誕生日1か月前にリストラで退職したのです。

私は退職にあたり、入社以来“人生の師”と仰ぐとともに、“親分”と慕ってきた先輩であり、上司でもあった通称“きつつあん”に手紙を書きました。当時、“きつつあん”は入院中で、その後まもなく亡くなりました。以下は、その時の手紙です。

その後、具合はいかがですか。

貴兄と一緒に仕事をし始めたのは、いったいどのくらい前になるのでしょうか。私がパイオニアに入社した時ですから、もう27年半にもなります。

この間、公私ともに、貴兄にはお世話になり、また、様々なご指導をいただき続けてきました。どれ程、一緒に飲ませていただいたか、もちろん数えることなどできません。飲みながら語り合った様々な出来事、あの語り合いがここまで、パイオニアという会社の中で働き続けてくることのできたエネルギーになっていたんだらうなと思います。

貴兄に釣りの世界に引きずり込まれたのは33歳のとき、17年前です。いったい何回、一緒に釣行させていただいたことでしょうか。2人の息子を連れての久里浜での釣り。遭難事件のとき、「この子は俺が守る」と言って、お兄ちゃんを抱き締めてくれていたこと。もうずいぶん昔のことになりますが、忘れようにも忘れることができません。

突然ですが、話は変わります。

27年半前、希望の就職試験に失敗した私は、腰掛けのつもりでパイオニアに入社しました。そのつもりが結果として27年半もいることになったのですから、考えてみるに、パイオニアという会社は住みやすい、いい会社だったんだらうなと思います。この間、宣伝一筋。最初は、海外宣伝、そしてカタログのクリエイティブ、労働組合専従としても情報宣伝部長としてでしたし、その後、CM・広告を含むクリエイティブ全般の担当となり、最近の10数年はイベントの担当として、宣伝と一口に言いながら、けっこう多様な仕事をさせてもらってきました。

初めてエレクトロニクスショーを担当したのが1982年。それから15年間取り組んで参りました。エレショーを担当するきっかけも貴兄でした。貴兄が担当ということにされ、困惑をしている姿を見ていられなく、大野君と二人で応援を申し出て、結果としては、瀬高さんも巻き込んだ取り組みになったのです。大阪の朝潮橋での最後のエレショーでした。「エンターテイメント」か「エンターテインメント」かで揉めたりしたことはありましたが、基本的には「おま

えに任せた。腹は切ってやる」と言われ、意気に燃えてやったことが昨日のことのようです。

エレショーから、オーディオフェア、モーターショーと広がり、さらに、展示会のほとんどに取り組みました。さらに展示会だけでなく、企業イメージアップのための様々なイベントの開発、キャンペーンイベントの実施に至るまで、まあ、すべてやるべきことはやってきたと言っていいかと思います。

ある意味で、パイオニアのイベントの基礎を築き上げることはできたと言えるでしょう。そういう意味で、私のできることはやり尽くしたという感があります。

私も、この10月で50歳になります。50歳を過ぎて、感性と実行力の両立を求められるイベントの先頭に立っていくことは困難だと思います。

「パイオニアのイベントにおける俺の時代は終わった」というのが実感です。

今、パイオニアは650人の人員整理をするという未曾有の危機にあります。お盆休みの前にすべての対象者（勤続5年以上、27歳以上の全員）に、退職を勧告する通知がされ、具体的な退職金の概算も知らされました。「9月30日付けで辞めてほしい。10日～2週間後には返事をせよ」というものであります。

様々な事業の失敗が重なり難しい状況にあることは確かです。大量の首切りもやむをえないかも知れません。それらをすべて認めた上で、それでもなお、私が納得できないことがあります。

それは、こうした事業上の判断ミスや、失敗をした役員の誰一人として責任をとっている人がいないと思えることです。社長や副社長は会長・副会長になりましたが、代表権はそのままですし、業界紙などにおいて「引き続き、経営に責任を負っていく」と決意を述べている始末。35人を指名解雇し、パイオニアのイメージを地に落としたことでも大きな責任のある専務は、今回の人員整理の説明をするために地方の支店へ行って、「目黒には、仕事をしないダニがいっぱいいる。ダニ退治をするんだ」と息巻いているとか。自分の会社の社員をダニ呼ばわりするとは呆れて物も言えません。そのほか、戦犯とも呼ぶべき役員さんたちの誰一人として辞めていないし、降格されていると思える人事は何一つありません。それでいて、従業員の首は650人も切ろうと言うのです。これだけの首切りをして、誰一人役員が責任を取らないなんて前代未聞のことではないでしょうか。

なぜ、「責任をとって俺たちは辞める。パイオニアを助けると思って一緒に辞めてくれ!」と言わないのでしょうか。そうすれば、気持ちよく辞めてくれる人たちもいるに違いありません。

まったくそんな素振りもなく、素っ気なく首を切られた形で、世の中に放り出される650人の従業員たちは、「いかにパイオニアの経営者たちが無責任で、酷いか」ということの伝道師になるに違いありません。それも実感のこもったりアルな表現で語り広げられていくことでしょう。

また、労働組合も組織としては存在しているけれども、それは、会社の経営失敗の責任を免責するためにだけ存在しているようなものと思います。委員長もそれは解っているようで、先日、ばったり会ったとき、私に「怒っているでしょ

う!?」と言ってきました。「うん、怒っている!!」。たったそれだけの、禅問答のような会話でした。この委員長は、20年以上も前、私が組合役員をしていた頃、分会長や、支部執行委員をしていて、個人的には親しくしている男です。しかし、彼も、パイオニアを駄目にした戦犯から除くわけにはいかないでしょう。何しろ、電機労連の中では、元気のいい中堅組合として、ストライキも先頭にたって闘ってきた組合を、連合の典型的な組合（新入組合員や職場委員の研修会の講師に人事部長を招いたり、その懇親会に副社長がゲストとして招かれるなど、私たちの時代には信じられないことがいっぱいあるようです）に変節させた責任は免れないでしょう（もちろん、彼だけの責任ではなく、前任者や、それを許してきた体制そのものの問題でもあります）。

こうした無責任な役員や、労働組合に対して、誰もが大きな不満を持っており、顔を合わせれば「酷すぎる」という話題になります。

しかし、誰一人、役員に向かってそれをはっきりと言葉にできる人はいません。そんなことがちゃんと言えるような風通しのいい会社なら、こんな事態を招いてはいなかったでしょう。ヒソヒソと語り合ったり、赤提灯でクダを巻くのが精一杯です。

今、パイオニアでは「去るも地獄、残るも地獄」という言葉が飛び交っています。これは誰が考えてもそのとおりだろうと思います。私のように、50歳にもなろうとしている中年に新しい職場が簡単に見つかるとは思えません。実際に、新聞の求人欄なんかを一所懸命みても、あるのは、土方などの現業労働者としての仕事ばかり。

一方、無責任な経営者がそのまま居座っている会社に希望が持てるのでしょうか？ もっと暗い会社になっていくばかりに違いありません。極端に言えば、さらに大きな人員整理が再び起こらないとは言えないし、倒産という事態だって考えられないわけではありません。

同じ地獄をみるのなら、こんな無責任な経営者の元で見たくない。地獄にしてももっと違った形の可能性のある方がいいのではないかという声に、説得力さえ感じます。

唯一、わずかな救いを感じさせてくれるのは、新しい社長が、同じ一族に属するとはいえ、まあ、まともな方だという印象を持たせてくれることです。わずかな回数ですが、エレシヨール・オーディオフェアに関する報告に伺ったなかで、この方の力になれるのなら、ささやかな協力を惜しまないという思いにさせてくれました。

繰り返しになりますが、私は、この10月で50歳になります。人生の大きな節目と言ってよいでしょう。

お姉ちゃんは昨年暮れに結婚。一番下の息子が今年の春、高校を卒業して、専門学校に進学。お兄ちゃん共々、まだ学生ではありますが、まあ、子育てにおける親としての一応の義務は終わったと言ってよいかも知れません。住宅ローンは、偶然にも今年の夏で終了。カミさんは、教師という職業を持っている……。そうやって考えてみると、私は、まあ恵まれていると言っていいのかも知れないなと気がつきました。

ならば、俺がやろう。そう思いました。

そして言ってしまいました。ところは、役員との個別面談。退職勧告の返事を求められた8月29日の面談でした。

「パイオニアの経営者はあまりにも無責任で、酷すぎる!!……」

たったこれだけのことを言うことと引き替えに、私は退職を決意したのでした。

当分、カミさんの扶養家族となって、「主夫」をやろうと思います。

そうやって改めて考えてみると、あれもやりたい、これもやりたいということばかり浮かんで来て、とっても楽しく、忙しい日々になりそうです。まだまだ体力も、気力も残した状況で、「毎日が日曜日」を迎えることができるのは、こんな幸せなことはないと言えるのではないのでしょうか。

もちろん、今の自分に痩せ我慢がないとは言いません。馬鹿な突っ張りと言う人もいるでしょう。収入は途絶えるわけですし、近所の手前もあります。でも、あんまり、気にしないことにしようと思っています。

こういう事態となっても、ぜひ、貴兄とはこれからも友人としておつきあいを続けさせていただけますでしょうか？ 心から、お願いを申し上げます。

長い間、お世話になりました。ありがとうございます。そして、これからも、よろしくお願いを申し上げます。

追記

なお、現在エレシヨール・オーディオフェア準備の追い込みの最中です。私の退社が仕事に影響があってはいけないのでマル秘になっています。当社内外のスタッフに伝わらないようお願い致します。

この手紙の中に書いたように、リストラにあたっては私もあれこれ悩みました。しかし、リストラをしなくてはならなくなった会社は皆、上司の顔色を伺うヒラメばかり。こんな連中と定年まであと10年も一緒に仕事をするのかと思ったら嫌になって、希望退職に手を挙げたのです。やたら多数の手が挙がり、会社は慌てて打ち切りましたが、998人退社。

まだ50歳。子どもは学生。仕事をしないわけにはいきません。ハローワークへ行きましたが、50歳にもなって宣伝の仕事なんてありません。あるのは、「トラック運転手」「警備員」「土方」「清掃作業員」だけ。この中から選べと言われても……と渋っていたら、「職業訓練校へ行け」との指導。「訓練校に行くのはいいが何を勉強したらいいのか？」と悩みました。

リストラで会社を辞めねばならない状況の中では、いろんなことがあって人間不信にも陥っていました。「人間を相手にしない仕事がいい」と考えて選んだのが、「造園科」。木さえ相手にすればいいと思ったのです（こんな考え方は大きな間違いだったと後々気がつくのですが…）。

そして、職業訓練校を卒業し、ハローワークの紹介で「松戸最悪の造園会社」（先輩職人の言葉）へ入社しました。ここで2年半、とにかく仕事を覚えるまではと、ひたすら我慢。そして、一人の庭師として独立し、さらに森林ボランティアと出会いました。かつては「桜と梅の区別もつかない」といつもカミさんに馬鹿にされていた宣伝マンが、プロの庭師になり、さらには、ちば里山センターの理事にまでなってくることができました。

この私に、植木屋という肉体労働者が勤まるのか？ 私にはまったく自信が持てませんでした。そこで考えたのが、私が職人を目指してどう学び、成長し、仕事と闘っているのかをパイオニア時代に親しくしていただいた上司や、仕事の仲間にきちんと細かく報告し続けるということでした。日々のレポートをいろんな人に送って、読んでもらう。読んでくれる人に恥ずかしくないように、逃げられないところへ自分を追い込む。そのために、パイオニア退社以降20年間、このレポートを送り続けてきました。読まされる方も大変だったでしょうが、私はこれを支えにして様々な辛いことを乗り越えることができました。お世話になった皆さんに、改めて感謝申し上げます。

今では、パイオニア時代に酷使した目の病気のこともあり、庭師は廃業。里やま活動、読み語り活動など、ひたすらボランティア三昧の日々です。リストラ中年の20年間の軌跡が何かの参考になれば幸いです。
(なお本文中の固有名詞は一部、仮名とさせていただきます)

2016年9月

高木喜

久雄